

研究・調査報告書

報告書番号	担当
113	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
A longitudinal analysis of alcohol consumption and the risk of posttraumatic symptoms. アルコール消費と外傷後の症状の縦断分析	
執筆者	
McFarlane AC, Browne D, Bryant RA, O'Donnell M, Silove D, Creamer M, Horsley K.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
J Affect Disord. 2009 Nov;118(1-3):166-72. Epub 2009 Feb 23.	
キーワード	
外傷後ストレス障害、アルコール	
要 旨	
背景： アルコール摂取の外傷後の心理的な症状への影響について調査した以前の研究は、矛盾した結果を生み出していた。	
方法： 外傷で入院した 1,045 人の患者が入院中に外傷前のアルコール消費パターンを評価され、また外傷後 3 か月でその前の 1 か月間を再評価された。不安、うつ、外傷後ストレス障害 (PTSD) が事故後と 3 か月後で評価された。サブサンプル(n = 167)では、血中アルコール濃度が救急部に来院した時に測定された。	
結果： 事故前の中等量アルコール消費は 1 週間と 3 か月後で低いレベルの心理的ストレスを予測した。血中アルコール濃度と精神医学的結果の間に有意な関連はなかった。生存者でのセルフメディケーションの状況より、PTSD は事故後のアルコール乱用を予測した。	
制限： アルコール消費による事故の重症度と種類への影響はコントロールされていなく、非参加がアルコール消費パターンに関連していたかもしれない。外傷後すぐに得られたアルコール使用の後ろ向き報告によるものであり、これらの報告が回顧時の状態に影響を受けたかもしれない。私たちのフォローアップは 3 か月に限られ、その前のアルコール使用と外傷後の状態との長期的関連の評価が必要である。	
結論： アルコール消費が外傷と外傷後の回復に潜在的な影響を与えるなら、効果的なスクリーニングと適度なアルコール消費に焦点を当てる初期の介入戦略を提唱する。	